

読書メモ2017年6月号(下)

京須借充著『落語家昭和の名人くらべ』(文藝春秋)ほか

やなぎさわかつひろ
柳沢克央 編

(信州・上田仮説サークル)

2017年6月24日(土), 6月例会用レポート

◇はじめに

先月号の「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校図書室蔵書。

今月もとにかく「読書予定リスト」の「在庫一掃」を心がけて、「消化吸收」をどんどん進めます。

◇読書記録または読書メモ(順不同)

◎和田秀樹著『受験学力』(集英社新書・2017年)

軽いタッチで(おそらく、短時間で一気に)書かれた本という印象。でも、内容は軽くない。気になった部分を引用。

○2003年に国立大学が、国立大学法人になった時点で、文科省に逆らえない構図になったということを今回の改革ほど端的に示したものはないだろう(最近、早稲田大学への文科省ぐるみでの天下り幹旋が問題視されたが、それ以前から補助金を握っているのをいいことに、法人化後、論文も書いていないのに、簡単に国立大学の教授になることが増えたようだ)。

私が、今回の改革を危険視している大きな理由は、文科省が、おそらくはよかれ

と思って行ったこれまでの改革が、ゆとり教育や観点別評価を例にとったように、ほとんどの場合、結果が目的と逆方向になっているというところにある。... (中略)

...

今回の改革でも、従来型の学力はダメで、自分たちの考えは絶対に正しいと過信しているかのようなところが感じられるが、実験というものは、結果が理屈通りに行かないものだという発想がまるで感じられない。

答えが一つしかないと思っている人間の考える「改革」では、答えがいくつもあるという発想を持った人間を生むことができるとはとても思えないのだ。(51 ペ)

○私は今後は学歴（特に学校歴）が将来を保障しない実力者会になっていくと思っている。その際に、勉強法を知っているか知っていないか、あるいは、勉強法を求めようという意識があるかどうか、その後の実力の伸びに大きな影響を与えると考えている。

社会に出た後、資格試験をいくつもとらねばならないとしても、一度、資格試験の受験勉強をつかんでしまえば、かなりの試験に応用が利く。

勉強法を受験テクニックで身につけておくという経験は、将来の成功のカギにもなりうるのだ。(69 ペ)

○たまたま、私の小学校時代の同級生が、その図書館に来ていたのだ。彼は「俺は、私立の大学でテニスをやるから」と比較的脳天気青春を謳歌していたが、彼の友だちにアドバイスしてほしいという。そして、地元で一番の進学校（それでも東大合格者はほとんどいない）に通う彼の中学時代の同級生を紹介されたのだが、彼はまじめにやっているのに成績が伸びないようだった。私は一言、「数学ができないのなら、さっさと答えを見て覚えた方がいいよ」と伝えた。「そんなんじゃ実力がつかない」というので、「灘では当たり前になっている」と返した。この言葉が効いたようで、彼は勉強のやり方を変えたようだった。そして、彼は、なんと東大の理科一類に現役で合格して、東大で私と再会したのだ。

この経験で、彼を含めて勉強をしているのに成績が上がらない大半の子は、決して頭が悪いわけではなく、やり方が悪かったのだと信じるようになった。(72 ペ)

○拙著に『ケアレスミスをなくす 50 の方法』という本がある。これは、私の主宰する緑鐵受験指導ゼミナールのスタッフに、受験生がやりそうなミスのパターンを

50 個集めさせて、それぞれに対策を打ち出した本だ。(93 ペ) (アマゾンで古本を取り寄せた。子どもたちに読ませたいので、我が家のトイレの本棚に置いてある)

○受験秀才は何でもそつなくこなす優等生というイメージがあるが、私が見る限り、東大生、特に理科三類に受かるような人は、長所を思い切り伸ばすような勉強をしてきた人が多い。… (中略) … 現行の受験勉強というのは、プロセスより結果が重視されている。苦手を克服しなくても、他の方法で合格できればいい、その他の方法を考えるのが受験勉強の「考える力」なのだ。… (中略) … これは外資系の人材コンサルタントに聞いた話だが、「日本人は、残業してでも完全なものにしないと与えた仕事を提出したがないが、ある程度のできなら、締め切りまでに出してもらった方ははるかに助かる。あとはこちらで手直しすればいいのだから。満点にこだわって締め切りに遅れるのは、実際は、0点と似たようなものだ… (中略) …」とのことだった。(97 ペ)

○今回の「答申」などを見る限り、教科学習は、社会のニーズとの断絶があり、学んだものに応用力がつかないというように受け止められているし、総合的な学習の時間の導入の際には、色々なメリットが議論されていた。

一方で、どういう場合にそれがうまくいったと言えるのかが不明確という批判が強かったのも確かだ。

これについて、前述の寺脇研氏と対談した際に明確な回答を得たことがある。

それは、総合的な学習の時間を体験して、子どもたちの勉強時間が増えれば成功だし、そうでなければ成功とはいえないというものだった。… (中略) …

今回の「答申」では… (中略) …まず、「総合型」の導入ありきで、目的は二の次のように見えるし、もっとうがった見方をすると、寺脇氏の思惑が外れたので、勉強を増やす効果があると明記できないのかもしれない。(119 ペ)

○私は大人になってからの勉強について、日本人は、この出力トレーニングが足りないことが問題と考えている。書斎の人や読書家と言われる人は多くても、それを有効に出力している人は少ない。ホームページやブログなど発信のチャンスは増えているのだから、それをしないのはもったいないことだ。

そういう意味では、受験勉強は小論文作成も含めて記憶の出力の優れたトレーニングと言えるのだ。… (中略) …

経験則からいうと、考える問題は頭の疲れていない午前中に行い、覚えるものは寝る前の2時間くらいに集中してやるのが効率がよさそうだというのは付言しておきたい。(164 ペ)

○共通一次試験やそれに続くセンター試験の導入後のほうが、ますます東大合格者、医学部合格者などに占める中高6年一貫校の割合が増えている。

結局のところ、先取り学習を行う中高6年間一貫校では、センター試験の対策に高3の時間を使うことができるからだ。試験を増やせば増やすほど、中高6年間一貫校に有利になるのだ。... (中略) ...

要するに(入試改革は)共通一次試験の導入の時と同じように、制度改革は都市部の中高6年間一貫校に有利に働き、余計にそうでない公立高校の凋落を招きかねない。(216 ペ)

○(灘中の)英語の教師はこういった。

「中学校で習う英語の単語が1000なのに、高校では5000習う。東大に行きたいのだったら、一万語は覚えなさいといけな。一般には中学生の頃のほうが記憶力が良いのにこれはおかしい。ならば1年で1000ずつ覚えて、6年で6000覚えればいい」

なるほどと納得したが、なんのことはない、中学のカリキュラムを1年で終えるということである。

数学の教師はこういった。

「中学校で習う範囲は... (中略) ...簡単すぎる。... (中略) ...でも、高校範囲は大変や。3年でやるのは無理やと僕は思てる。だから中学範囲を1年で終わらせて、高校範囲を4年かけてあげる」

このカリキュラムが、灘高が難関校に強い所以だろう。(217 ペ)

○今回の改革にしても「従来型の学力」が維持できる保証のシステムがまったく用意されていない。... (中略) ...対策さえしっかりすれば翌年十分受かるという啓蒙や、落ちた人の心のケアのシステムをしっかりと構築しておかないと、雇用改革の悲劇の二の舞になりかねない。... (中略) ...

この改革の怖いところは、前にも述べたように、絶対に正しいとつくった側が信じていて、うまくいかなかった時のリスクヘッジを用意していないことだ。

東大の入試を改革するなら、京大は従来型の入試を続ける。たとえば、そういう

方法をとることだって可能だ。それだけで、ずいぶんリスクが回避できる。

流動性の世の中で、絶対に正しいことなどそうあるものではない。それがあると信じる人たちがつくった改革であることが本当に怖い。

そして、この改革が結果的に努力で階層が逆転できるというジャパニーズドリームにとどめを刺し、そうでなくても始まっているアメリカ型格差社会化をさらに加速させるということが私の杞憂で終わることを心から願っている。(229 ペ)

「入試制度改革」の歴史は文科省にとってことごとく「裏目に出る」という歴史だ。「共通一次」および「センター試験」で「私高公低」および「受験産業の肥大化」を招き、「国公立大学受験機会複数化」は複雑化が嫌われて先細りとなっている有様だ。

本書での和田氏の考えに賛成する。2020年度からの新制度導入も私は「裏目に出る」と思う。それも大きく裏目に出ると予測する。今から、真に受けないように「眉につば」を塗って準備をしておくことにする。

文科省は自ら望んで自己崩壊の道をたどっているように見えてならない。「寄席はなくても落語はできる」(立川談志)、「学校はなくても授業はできる」(柳沢克央)。

◎中西輝政監修・監訳『チャーチル名言録』(扶桑社・2016年)(私物)

ネットで名言録を検索していてチャーチルの言葉が気になったので買ってみた。なるほど力強いが蛮勇でなく深い勇気を感じさせる思慮深さも兼ね備えている。英語の原文も掲載されているので手許に置いておき、折に触れ、じっくり味わいたい本だ。

○正直であることはいいことだ。しかし首相にとってきわめて重要なことは正しくあることだ。

○伝統がなければ、芸術は羊飼いのいない羊の群れにすぎず、革新がなければ、それはただの死体である。

○多くの場合、強く物静かな男というのは、何を話してよいかわからず静かにしているだけで、静かにしているがゆえに、強いと評判になっているだけだ。

◎ディオン・ン・ジェ・ティン著『東大留学生ディオンが見たニッポン』(岩波ジュニア新書・2017年)

シンガポール出身の著者が東大に留学し、感じたこと、学んだことなどを綴った異文化体験記。篠ノ井高公図書館の新入荷本コーナーで手にとってみた。興味をもった部分を引用する。

○はじめに 読者の皆さんへ

この本に読む価値があるかどうかは、読者のあなたの判断次第だと思います。この本を書き始めたきっかけは、留学生である自分の姿勢に共感を持ってほしかったためではなく、日本人と日本社会の仕組みによって、外国人への対応に深く関わるそれぞれの問題と課題の顕在化に関心があるからです。近年、積極的に国をグローバル化させようと努めた日本政府の取り組みの結果、私のような留学生が増えてきており、日本の社会を核心的に変えていく勢いが強まってきました。(柳沢注:「核心的」という意味が…中国語的表現か) これは、紛れもなく日本人と外国人のお互いへの思いやりと人間同士の間にかかる不可避な衝突と無理解といった交流の裏表のためなのでしょう。

外国人が日本をどんな視点からどのように見ているのか、そして日本人が外国人を自分たちの社会にどのように受け入れているのか、ということ留学後ずっと課題として見つめ、考えてきました。本書を執筆することで、その課題をより深く幅広く考えることができた、と私は思っています。

私は、留学する前、家族旅行や学校の交換プログラムなどで、九回も日本を訪れたことがあります。日本人を驚かせるほど頻繁に日本に来ていたのです。しかし、観光客の観点から味わった日本文化は、留学生として接した日本社会とずいぶん異なっていました。

この本では、まず、留学生の目から見た日本についての経験談に基づいて話し、次に日本の社会に広く存在している関心をもった課題について論じたいと思います。自分とは人種と生活歴の異なる人間が、どんなふうに自分の国を考察しているのか、そして日本の国際化と復活において社会のメンバーの一員である自分がどうやって貢献できるか、ということに興味をもっている方はぜひ、この本をお楽しみ下さい。

○つまり、人種による帰属意識以外、国民性から生じるのは、国としてのアイデンティティを建国の時代から守られ、話されてきたシンガポールの非公式の言語です。「シンガポール人っぽい」とは、シングリッシュを話す習慣が身についているか

どうかという基準が大きいです。つまり、シンガポールで生まれ育ったけれどもシングリッシュを話さない私よりも、仕事の都合などで家族と一緒に移り住んで現地で英語を学びながらシングリッシュも少しずつ覚えてしまった日本人のほうが、「シンガポール人っぽい」と思われることがあります。ここで強調したいのは、「〇〇人っぽい」という判断は、非常に流動的であり、国籍や人種などの決まった事実に基づいたものではなく、各文化と社会の特徴を基にグルーピズムと帰属意識による判断です。

大学一年目の帰省を通し、言語と人間のアイデンティティ的な関係をより理解できた気がします。ことばが思考、ものの見方、感情の表し方、そして、私たち人間の性格にまで影響することもわかりました。留学経験者は、おそらく自分の国の文化と違う文化を学び、深く理解したら、世界観も変わってくるでしょう。日本語でも、英語でも、自分の気持ちをうまく表現できるよう、また、完全にシンガポールの人ではないと思われぬように、新しいホームである日本でも、多文化をうまく扱うグローバルな人間になれるように頑張らないといけないなあと、シンガポールから離陸して反省していました。(115 ペ) (この部分を読んで思い出した言葉「私たちは、ある国に住むのではない。ある国語に住むのだ。祖国とは、国語だ。(シオラン) (紹介：山本夏彦)」)

○言語習得に不可欠なのは、その言語の背景となる文化への理解です。ここでの「文化」は、茶道や短歌、アニメや J-POP などの文化のイメージではなく、具体的に説明すると、外国人が考える「私がこの国の人だったら、この場合に何を言えば自分の言いたいことがうまく伝わるんだろう」ということです。極端な例を挙げますと、日本語を学び始めたばかりの外国人や日本に住んだことのない外国人日本語学習者が「ありがとうございます」、「お願いします」と「すみません」の日常的な使い分けができず、よく何に対しても「ありがとうございます」と言う。エレベーターのドアを開けてくれる人にも、お店で注文するときにも、とりあえず何を言えばいいのか自信がないときに言います。また、何かを頼まれたときの断り方も文化を理解していないとうまくできないことのひとつです。これに関してよく聞くのは、日本だと曖昧な断り方が最も丁寧であり、西洋の国だとはっきりした答えをしないと、特に短気な人が時間の無駄だと思ってキレてしまうこともあるらしいです。どの程度まで、どいうふうな相手に相手の気持ちを配慮するのか、そして言いたいことをどんな口調で言えばいいのか、それぞれの要素を社会の基準に合わせて自分のコミュニ

ケーション力を整えることが、留学生として苦勞したところでした。しかし、それさえ身に付ければ、言語だけでなく、言語を超えた理解によってスムーズなコミュニケーションができれば、外国人が感じる言語の障壁を切り抜けていけるでしょう。

コミュニケーションは、言葉だけじゃない。一番有効なコミュニケーションは、言葉を超えたものである、と私は留学の経験から学びました。ぜひ、みなさんにも、中高生でも、大学生でも、社会人でも、今これを読んでいるあなたに、このような経験を積んでほしいと心から祈っています。人は成長するものだから。(163 ペ)

○ところで、本書では留学の良さばかり推していたのですが、じつは留学は、必ずしも楽しいことばかりというわけではないのです。

なぜなら、留学は大変だからです。三年間も留学経験を積んだ私、そしてもっとも長い留学経験のある友達もみんなそう思っています。

しかしそれが留学のメリットです。大変だけど面白い、面白いけど大変、とりあえず人間として成長し、自分の知らない自分を見つけ、将来の自分にたどり着くまでにいろいろ試してみて、自分を更に理解する経験なのです。

だからこそ大学からでも良いですが、もっと早いうちにいろいろやってみたほうが良いと思います。海外に行って異文化を学んだり、日本国内の各地域についての理解を深めたり、同時に自分への理解を深めるには、自分から探っていく意識から始まるのです。この人生には、可能性が無限にあるから。(193 ペ)

○「幼時から日本に住んだことのない人は、どのくらい日本語を勉強してもネイティブにはならないよ」と日本語の先生(日本人)に言われたことがあります。当時、そう言われて苦悶に顔をゆがめてしまったのですが、素直に言ってくれた先生に今では感謝の気持ちばかりです。もうちょっと早めに知っておきたかったのです。中高時代に日本語を科目として取った頃、自分がずっとずっと頑張ればいつか日本人みたいに話せるようになるでしょう!の勢いと熱心さで勉強してきました。しかし、留学しに来て三年が経ち、想像していた自分の理想を諦めました。弱気で諦めたわけではなく、実際ネイティブになることが不可能だと信じているからです。…(中略)…やはり日本語に限らず、何の言語にもネイティブとノンネイティブのばらつきがあり、そのばらつきの裏にある広義的な「文化の差」を理解することが、その言語をマスターすると同時に進めていかないといけないことだと思われま。 (199 ペ)

○今まで留学生，日本のグローバル化，日本人，日本の大学，それぞれの話題に触れましたが，それらのベースにある問いはこれです，「日本はどのようにして〔グローバル社会〕になろうとしてるんだろう？」

理由がたくさんあると思いますが，最も大きなのは超少子高齢化に伴う経済・社会問題でしょう。日本の経済を復活するために，外国人をこの国に呼び，日本人に海外経験を勧め，あれもやてこれもやてたくさん改善しようとしてきた結果，この社会はほんとうに変わっているのでしょうか？ グローバルな社会になっているのでしょうか？

読者のみなさんは，これから先にある未来が無限に輝いていると思います。みなさん一人ひとりの強みを活かして，弱点を磨き，今までにもっていたステレオタイプと偏見を覆し，日本における自分がどのようにこのグローバル化に貢献できるのかを考えてほしいです。これは，国にも自分にも，将来的な話ですが，とても役に立つことだと思われま。…（中略）…私が中学校を卒業した日に，一番仲の良い先生（私の歴史の先生であり，私がリードしていた生徒会の担当教員でもあった）にメッセージカードをいただきました。そこに書いてあったことをみなさんに伝えたいと思います。中学校卒業してからもう六年が経ちましたが，心に刻み付いた言葉は一生忘れられないでしょう。What can be said has been said. Go change the world. (209 ペ)

文章が独特で，「ゴーストライター」に頼った文章ではないことがわかる。英語的な考え方や中国語的な考え方が混じっているようで，不思議な感覚を覚えた。

無意識のうちに，（国際化）＝（英語が話せること）と単純化しがちであることに気づかされる一冊であった。本書の主張をひとことと言うと「国際化にはまず〔気の持ちよう〕が大切だ」ということだと私なりに理解した。

◎京須きょうす借す充ともみつ著『落語家昭和の名人くらべ』（文藝春秋・2012年）

語彙がとても味わい深く，言葉に奥行きがある。話芸を紙上に表現して，それを味わうのが目的だから，こうした要素は大変重要である。文藝春秋らしい読み応えがある本である。

昭和の名人六人（五代目古今亭志ん生，六代目三遊亭圓生，八代目桂文楽，三代目桂三木助，五代目柳家小さん，三代目古今亭志ん朝）についてたっぷりと論じ，また評している。

古今亭志ん生

○志ん生の体内には隠れた濃度の高い“まとも”と、指数の高くて表立つ“まともならざるもの”とが、心の乱れを生むことなく融合していたのではないか。そこに巨大なエネルギーが生み出された。煮ても焼いても食えない芸人がそのエネルギーを手にしたのだ。いや、そういう芸人だからこそそれほどのエネルギーに恵まれ、それを使いこなせたのだが、その地点で他の噺家と比較される芸でも存在でもなくなったと言えるだろう。(36 ペ)

○人物描写をほどほどにして柔軟に話し、聴き手の想像に委ねる、あるいは想像を喚起する。これはとても現代的な落語話芸のあり方でもあって、志ん生が古風な語り口にも拘わらず、戦後にブームを巻き起こした秘密は、ここにあったかと思われる。「道場での立ち合いならあたくしは志ん生に勝てるが、野試合となったら、だいぶ斬られる」という圓生の評は、好敵手の言として重みがある。名人の道を放棄したはずの志ん生が大勢の聴き手を手玉に取り、回り回って名人といわれるようになった。そんな日が来ることを、ひたすら歩いて稽古していた頃の志ん生は想像していただろうか。どうも、皮肉なもんだ。晩年の志ん生が内心で呟いていたのではないか。(50 ペ)

三遊亭圓生

○この『らくだ』のサンプルを眺めてみると、圓生は型の芸人である以前に演出家であったように思われる。人物の心理と生理のとらえ方に不自然なところはない。型を全うするために心理や生理を操作するつもりなど毛頭なかったろう。

となれば、まず(圓生を)型の人と見るのは正確ではない。少なくとも『らくだ』では、型は先行していない。まず、というなら、圓生はまず心理や生理、つまり人間描写の人なのであって、型はそれを達成するための道具のようなものだったのではないか。(61 ペ)

○身から切り離し難い型との格闘がやがて始まる。その終息は思いのほか長引いて、型との闘いというよりも自分自身との闘いのようになった。

自身との闘いは最終的にめでたく解決したのだが、落語界の状況は圓生の思うところに程遠い。六代目三遊亭圓生の一生は、型と人間との闘争に終始していただかなかったか。(62 ペ)

○そのめざましきは演芸の枠を超えて広く認められるようになって、晩年には“現

代の名人”の格好のモデルにまで至った。そこまでいったのは、ただ噺がうまかったから、語り口に艶と格調があったから、噺の数が圧倒的に多くて正確だったからというだけではなかつただろう。

あの高座の白湯道のような見事な型も持っていたからだ。“名人”には形も大切。はまって芸人が腐る「型」も、なくては正札に高い値が付かない。型のしがらみで危うく腐るところだった六代目三遊亭圓生の晩年に型が錦上花を添えたのは皮肉であって、しかしめでたい。

まず型から入って型から離れる。これが肝心でございます、が圓生の持論で、弟子や後輩には型をたたき込んだ。

その教育法の是非は別にして、型に入って型を離れるとは、日本文化一般のごく浅いところでお題目のように唱えられている月並みな公理だ。原理、真理には遠く、俗理と言いたくもなる。

それでも六代目圓生の口から出れば納得せざるを得なかつたのは、入るにも離れるにも壮絶な闘いがあったということが、この人ならば十分に俵ばれたからだった。

(79 ペ)

桂文楽

○好き嫌いで芸の判断をしない心得を身に付けているつもりがあったのだから、我なら可愛げがないが、落語界に比類のない巧緻な芸の形を持っていた桂文楽に、個人の嗜好を寄せつけない絶対性があったのは確かだ。

八代目桂文楽という格別の銘柄品を頂点に多くの優れた噺家が近代東京落語の最後の花を咲かせた時代に間に合った私は幸せだった。個性とアイデアは豊かでも、江戸東京の精神風土——気風に根差した噺家があまり見当たらない平成の落語ブームは、次世代の噺家と聴き手をどこまで育むことが出来たのだろうか。(102 ペ)

○八代目桂文楽の根幹は、いわば極楽トンボの世界の活写にあったようだが、それを決して毎度ばかばかしいお笑いを申し上げ……、の浅薄な高座に留めなかつたのは、文楽の品格豊かな口演ぶりと庭園のように整った、巧緻な語り口だったろう。

戦後の日本は次第に豊かさを取り戻した一方で富裕な旦那衆はひどく減り、遊興の場所や形態も様変わりして、花柳界でのお座敷遊びやそこでの旦那と芸者・芸人とのやりとりなどは伝え聞く夢物語の世界へ入ってしまった。そんな夢物語を如実に話して聴かせた噺家はといえば、ただ一人桂文楽だったのだ。

親の世代が楽しみ、あるいは憧れた花柳界遊びの艶やかな哀歓と表裏を微塵の崩

れもない美形の語りで描き出した桂文楽の世界には、国破れて喪失した佳き日本の、佳き都会の、麗しくも情緒豊かなアトモスフェアがたちこめていた。(112 ペ)

○桂文楽には慎ましやかな物腰の割りに芸にはかなりあざとい誇張もあった。いや、慎ましきで包んで、過剰な、誇張した表現をあざとく感じさせなかったと言い換えよう。うわべはあくまでも綺麗事に仕立て上げているが、潜在する過剰や誇張をインパクトにして抜かりなく聴き手を引き付ける。そこに文楽の早い売り出しの秘訣があったとも思いたくなる。(124 ペ)

桂三木助

○三代目桂三木助の語り口は、ひとことで言えば淡々としたものだった。節目で間をあまり大きく取ることはなく、抑揚を多用して歌い調子に近づくこともない。引き締まったリズムとテンポで遅滞なく話を運んだ。

文楽や圓生のような声の色合いの変化はないので渋く、地味にも感じられたが、メリハリは利いていて耳に快い。さっぱりした江戸前の気風が感じられた。

江戸前ではあったが、職人口調と言うよりは商人口調。少し小腰を屈めた小商人風の江戸前に思われた。

江戸前とは言ってもどこか新しい。その点が古風に江戸前だった三代目三遊亭小圓朝や八代目三笑亭可楽とは異質だった。

「広重百景」流のセンスにも見られるように、マクラにせよ話の本筋にせよ、ことばの構成はことのほか簡潔明瞭、少しも持って回らない。それは後輩も含めて他の誰にも求められない、俳味と“聴く小説”のような世界を生み出し、それが三木助を新古典派の旗手の座へと押し上げたように思う。(138 ペ)

○三木助（の顔色）はもっと変化が複雑で、青ざめていたり土気色の日もある。声やしゃべりに変化はないが、演者の血色がよくないと聴き手も晴れ晴れとは楽しめない。

主客対面の芸・落語の演者と聴き手の間には、そんな微妙な心理作用があるのだから、噺家は努めて綺麗に高座を努めるべしで、病気なら仕方がないが、不機嫌な顔や不景気な顔を人前に曝してはいけない。

昭和三十三年（1958）頃だったと思うが、三木助休演の情報が流れ、その内に東京新聞の夕刊に三木助の書いたエッセーのようなものが載った。入院している、志賀直哉先生から御見舞に頂いた近著『八手の花』を読む、といった日記風の短文だった。

どうも胃潰瘍のような病気と思われたが、さりげなく志賀直哉との交流を示すあたりが三木助流に思われた。）

昭和三十五年（1960）三月三十一日の人形町末広での独演会では三木助の血色はとてよく、三席たっぷりやってくれた。さらにご機嫌で巧みな踊りも楽しませてくれたので、それが人形町末広での最後の独演会になろうとは思わなかった。（153 ぺ）

○三木助は自分の表看板になりすぎたこの噺を否が上にも名品に仕立てようとした形跡があった。私が最後に聴いた昭和三十四年（1959）三月三十一日の人形町末広の独演会での口演は、本体より少しアクセサリーが目立つ結果になって首を傾げさせられた。

名手も匠気が勝ちすぎると矩^{のり}を躰^こえるということ、加えて世間はますます煽るものだということを十代の頃に目の当たりにしたのは、その後に芸能の仕事をする上でこの上なくありがたい体験だったが。“三木助の芝浜”とは、聴き手も含めての現象として歴史に残る事柄であるには違いない。（155 ぺ）

○何度も言うように三代目桂三木助は淡泊で江戸前の語り口を思わせる人だったが、会話のやりとりでは目と、そして変な話だが鼻が大きくモノを言っていた。上下を付けるといふ、人物演じ分けの基本動作で三木助はあまり大きく首を左右に振らなかったが、目の配りが機敏にして的確で、それが顔の動きを補って余りあった。

これは日本舞踊の師範だった三木助に備わっていた武器のようなもので、目配りがいい加減のまま首を回し、胴をくねらせても、タコ踊りの域を出ない。

加えて大きく高い鼻の先端が左右に差し向けられれば、他の噺家以上の視覚的なメリハリがプラスされる。（160 ぺ）

○実は、従来のサゲ方のほうが心理描写としてはずっと高度だから、一息でキッパリ決めるより至難なはずだ。だが、明快卒直のほうがアピールすることが多いのも昔からのことだ。三代目桂三木助は『芝浜』でうまい勝負をしたとは言えるだろう。

サゲは噺本体から心理的に隔離して、いわば生理的な次元で鮮やかに決めるほうが効果的という考え方もまた古くからあるので、三木助流がいけないというわけではない。三木助は自分の芸の体質にはまるサゲの言い方に徹したまでのこと。それが『芝浜』で当たったとも言えるだろう。

三木助に似ない芸風の噺家がサゲだけ三木助を借りては、よい結果は得られないとうことだ。『芝浜』のサゲが今、従来型に復帰しつつあるのは、「三木助の芝浜」への偏った評価がようやく過去の現象となった証拠だろう。（163 ぺ）

○三木助にはシャープな言語センスがあったので、また文芸的な言語のサポートを買って出るアドバイザーにも恵まれたので、戦後に再出発してからは最短距離を走ってあっという間に第一線の人となった。

だが、落語にとってことばはすべてではない。美文名文が必ずしも優れた文学ではないように、ことばがみごとに整っただけでは、噺家は最上階へは行かれない。ことばに欠けや乱れがあっても、それを超える何かを描き出せば、そちらのほうが上位の噺家となる。(164 ペ)

柳家小さん

○小さんは八十過ぎてなお高座をつとめ、長生きの噺家という印象を残したが、それは健康に恵まれた結果なのでもあって、五代目小さんはむしろ、早めに一定の成熟に達した、いわば早熟の噺家として捉えるべき存在なのだと思う。

早熟の噺家が同時に長命の人となった。そこに強運を見ることは容易だが、単純にそれを幸と考えるのはいかがなものか。

早熟の才に恵まれたのは噺家として、また一人の人として幸以外の何ものでもないが、長命は個人の幸いではあっても、早熟な芸の保持者として必ずしも幸ばかりではなかったはずだ。

さらに小さんは、青年期が昭和の長く激しい戦争の時期に合致する世代の人だった。それは小さん一人のことではないが、強運の人にとって一つの不幸ではあったろう。

その反面、そうした時世には噺家になり、噺家を続ける同世代のライバルがごく少ない。その結果、いつの間にか一人天下の域に到達することになった。

それもまた強運のなせるところだったのだろうが、そういう境遇がストレートに幸であったか、多少の不幸もあったかは、そう簡単には言えないことだ。小さん自身にとっても、また落語の世界にとっても——、と言っておこう。(191 ペ)

○苦勞自慢ひとつないなんとも平穩無事の戦記ではある。少しも被害者意識がない。しかし戦争とはいえ、そうした側面もあってこそその人間の世界で、大物になる噺家はどんな境遇でも雑魚の了見にはならないようだ。(203 ペ)

○昭和二十五年(1950)九月、小三治は三十五歳で五代目柳家小さんを襲名した。以後は順風満帆というところで、強運の人・小さんに逆らう波風はほとんど立たなかったように思われる。

しかし、風は船を停めることがある。逆風はほどよく吹けば航海の助けとなる。

(205 ペ)

○平成七年（1995）に五代目柳家小さんは重要無形文化財保持者すなわち人間国宝に指定された。噺家国宝の第一号で、国家の演芸芸人への評価は遅ればせもいいとこながらどうかここまで達したの感があった。

それでもひどく物珍しい。あの当時、若い噺家たちはよく、「このあと国宝が出て来ますよ。国宝ですから、あたしたちみたいにヒョコヒョコ歩いちゃきません。ガラス張りのケースに入って出て来ます」と他愛のないジョークで笑わせていた。

国宝になったあとであたしが何か悪いことでもしたら、国宝を取り消されるんですか？

小さん本人が役人にこう質問したという話がある。いかにも噺家らしくておもしろい。無闇に名誉をありがたがらず、醒めていてとぼけている。

そういうことのない御方と信じてご指定申し上げました、といった回答があっただろう。芸人と役人が異種の間人でなくては、どちらの世界も先が覚束ない。(215 ペ)

古今亭志ん朝

○おもしろくはない人がおもしろい落語を語って聴かせた。それが志ん朝という人のミソでもあった。それは多くの噺家に共通するところでもあって、そこを取り違えると噺家も落語もわけのわからない領域に運びかねない。志ん朝が自分をどう意識していたかは詳らかにはしないが、とにかく父の志ん生とはだいぶ異なる芸人ではあった。

(230 ペ)

○古今亭志ん朝はメディアにプライバシーがあふれるありさまを世も末の思いで眺めていた。とくにプライバシーを売る芸能人やタレントには苦り切るばかり。なんでそこまでしなけりゃならないんだ。志ん朝には、かつての、もっと気の確かな時代のメディアで“タレント”として活躍したキャリアがあっただけに、末世の思いは人一倍だったようだ。(233 ペ)

○古今亭志ん朝は平成十三年（2001）にまだ六十三歳で他界したが、意識下のことではあっても、また疑似体験的ではあっても、その頃八十六歳に達していた柳家小さんと部分的に幻の同世代だったと言えなくはない。幼稚園児の年頃から寄席芸人になった六代目三遊亭圓生とも共通する特別な育ちの人なのだ。(236 ペ)

○身の処し方においても、礼節や作法においても、また存分に自分を発揮すべき芸

人にその反面で求められる節度においても、けじめとモラルにおいても、卒直と洒落のバランスの取り方においても、人知れず瘦我慢することにおいても、そしてそんな諸々がうまくいかなくて照れる気合いにおいても、古今亭志ん朝には明治型東京人を地でいく人間性があった。(237 ペ)

○そろそろ志ん朝師匠もレコードを作られてはいかが。私の持ちかけを志ん朝が断り続け、実現までに何年もかかった、というヒストリーはこれまで折に触れて記してきた。そのいきさつやその間の事情を繰り返して述べるつもりはないが、古今亭志ん朝は一方で「芸はその場で消えるからいい。残すものではない」と、いわば絶対論的レコード否定をしつつ、もう一方では、「僕はまだ先輩を差し置いてレコードを作る身ではない」という相対論を唱えて逃げの一手だった。…(中略)…

「消えるからいいんです、残すものじゃない。それにまだ僕なんか、そういう齢じゃないからねえ」

そう言い捨てるようにして付き人の運転するアルファロメオのオープンカーに乗り込み、暮れなずむ日比谷のストリートを駆け去った古今亭志ん朝。(240 ペ)

○志ん朝六十三歳の死は噺家としていかにも早く、あと十年、十五年があれば芸の味わいは一段と深まったと思われる。だが芸と人生の基本的な方向性は、もう行き着くところに達していて、別の道を歩むことはなかったと思われる。その意味では当人にも思い残すところはなかったのではないか。(244 ペ)

○古今亭志ん朝は現代の聴き手が首を傾げる不条理や非現実が残る古風な噺をやってもそれほどアレルギーを起こさせなかった。それは噺がどうこう以前に、とにかく聴かせてしまう美質に恵まれていたからだ。楽曲の解釈が第一に挙げられるようでは、まだ本物の名ピアニストとは言えない。(246 ペ)

○こうして芸の形と骨格が兄よりも父よりもはっきり見える人になった志ん朝だが、それが堅い語りを感じられなかったのは、躍動的なリズムとスピーディな運び、そして息が長い上に微弱な旋律性が匂う魅力的なフレーズを体得したからだった。

これは志ん朝自身の芸風の確立と成熟に他ならないが、八代目桂文楽の影響も見逃せない。いや影響では語弊がある。志ん朝が桂文楽を第二の芸の指標に定めたことの結果と言うべきだろう。第一の指標が志ん生であったことは言うまでもない。(247 ペ)

○志ん朝と同世代の他の噺家の細胞には染みていない古き佳き時代のセンスが志ん朝を促して、桂文楽モードの唯一無二の後継者——、いや、新たな再現者への道へ歩ませたのではなかったろうか。(249 ペ)

○比較的遅く取り組んだ『文七元結』は誰の系譜というよりも志ん朝がドラマとして大成した観があった。だいぶ芝居での経験を採り入れたと覚しき手法と演出があって、投げ与えられた財布を文七が投げ捨てようと振りかぶり、触感で本物の金であることを覚るしぐさなどは、芝居がかり以外の何ものでもなかった。

話芸の範を超えたと批判するのはやさしいが、あの、「程」を重んじた志ん朝がなぜそこまでしたかをよく考えてみるべきだろう。『文七元結』がそうした演技の拡大に耐える、いや、そうした演出でいっそう映える超大作であることを証明したのは、三代目古今亭志ん朝だったと申し上げておきたい。三遊亭圓朝作の『文七元結』は噺を超えた噺でもあるということだ。(250 ペ)

○芸談を聞くのはむずかしかったが、何気なくしゃべる蕎麦の話話を芸に置き換えて、志ん朝の姿勢やセンス、考え方などを探るのは比較的容易だった。

芸が、味がうまいだけではいい芸人でも蕎麦でもないのだ。心がけが、客扱いが、タイミングが悪くては人気が出ない。芸も蕎麦も評価のポイントはひとつでないから一概には言えないが、総合的な判断というものはある。だが、それが絶対というわけでもない。(253 ペ)

○志ん朝の年回りでは虚空蔵菩薩が守り本尊で、その使い媛は鰻。虚空蔵菩薩像の足元には必ず鰻が描かれる。…(中略)…終了後、圓生は麴町にあった行きつけの鰻屋・丹波屋に一同を誘ってねぎらいと壮行の小宴を張ろうとしたが、志ん朝は謝絶してそこに加わらなかった。

新協会旗揚げは結果的に挫折し、志ん朝一門と圓蔵・圓鏡一門は落語協会に帰順したため、志ん朝の別行動に下心があったと見る人もいたが、なんのことはない、鰻屋は志ん朝の鬼門だったのだ。新協会旗揚げは自分の最後の日ほどの大事ではなかったわけだ。(258 ペ)

○それにしても古今亭志ん朝がもう一段、気楽な芸境に達していたなら、そこに「名人」の境地はあり得たかもしれない、とは思う。

もう少し聴き手をリラックスさせられたなら、いわく言い難い空間が生まれていたならあるいは一、と無いものねだりをするばかりだが、これもまた、志ん朝が自覚済みのことだったように思われる。(261 ペ)

ああ、いい文章たちだなあと思う。私の好みである。久しく落語の CD を聴いていないので、たまには何か聴いてみようか、などと思った。噺家たちの語りは授業をするときにとても参考になる。特に圓生と志ん朝の話し方が私には真似しやすい

と思っている。

◎飯野高広著『紳士服を嗜む』(朝日新聞出版・2016年)(私物)

男性ファッションの本。版の組み方が細かく、通読には不向き。通常は本棚に置いて、必要な時に辞書的に検索して使う本か。男性のスーツ(主として注文服)などに関する蘊蓄話が満載。気になったことについて辞書的に検索して読むことにする。

◎山路敏英編『あなたお葬式どうする?』(山路カウベル堂・2017年)(私物ガリ本)

この本を読み終わってから、偶然、『たのしい授業』6月号(仮説社)で小沢俊一さんが書いた書評を読んだ。仮説社の向山さんからメールが来ていたので次のような返事を書いて送った。

○昨日、今日と山路敏英さん編集の『あなた お葬式 どうする?』(山路カウベル堂)を読んで、今朝、読み終わりました。私自身の宗教への姿勢を問い返しながらかく読むことができ、とても有意義でした。私自身の生き方を根源的に考えさせられました。とても深いです。6月号の小沢俊一さんの文章「あたたかな無神論」は、本書の内容を極めて的確に伝える書評で、素晴らしいと思いました。(メール以上)

この本を読んで、私は無神論者・唯物論者ではないらしいことがわかってきた。私は柳沢家のご先祖さまからの流れを大切にしたい。仏教徒以前に私は先祖崇拜者であることがわかった。

私の幼いとき、次の二つの出来事があったことを鮮明に覚えている。

①早朝、祖母が日の出に手を合わせて「なまんだぶ、なまんだぶ…」とつぶやくようにして祈っていた。(我が家の檀那寺は曹洞宗なのだが、なぜか…)

②初夏の朝、父と一緒にクルマで畑に行った。朝靄の中、帰りに父は道端のアザミを鎌で切り、家に持ち帰った。祖母はこのアザミを見ると、すかさず短く切り整えて仏壇に供えてお祈りをしていた。この冊子の最後にこの時の印象を詠んだ歌を載せた。

◇次回以降の予告

◎加藤陽子著『戦争まで』(朝日出版社・2016年)

◎ローレンス・A・カニングラム著／長尾慎太郎監修『バフェットからの手紙(第4

版)』(Pan Rolling 株式会社) (私物)

◎広瀬和生^{かずお}著『談志の十八番—必聴! 名演・名盤ガイド—』(光文社新書・2013年)
(私物)

◎吉田敏浩著『「日米合同委員会」の研究』(創元社・2016年) (私物)

◎内田樹著『寝ながら学べる構造主義』(文春新書・2002年)

◎ちくま評伝シリーズ《ポルトレ》『岡本太郎』(筑摩書房・2014年)

◇まとめ・つぶやき

新聞記事のコピーをしながら考えたこと。コピーには劣化がつきもの。この劣化を補ってあまりあるその人の生命力, 時代の精神を加味して「次のランナー」に「バトンタッチ」することが大事なのではないか。= 「[現状維持] は [後退] である」(ウォルト・ディズニー・米国・1901~1966) この言葉はどこかで聞いて覚えていた。これを書く際にネットで検索してディズニーの言葉だということがわかった。

[6月8日(木)頃メモ]

[2017年6月22日(木)脱稿予定] 6月10日(土)の「渡辺規夫さんの会」は歴史的なサークル集会だった。西村寿雄さん(大阪)とお話することができて本当によかった。私も24日(土)を待たずに「読書メモ6月号(上)」「(ウソの作文)合格体験記」の発表をさせてもらうことができてよかった。

さっき, 化学研究室の流しで手を洗っていたら, 体育の授業が終わった女子生徒たち数名がグラウンドを歩いていた。風に吹かれて揺れる黒髪が日光に輝いて美しかった。そこで一首。「五月晴れ黒髪風に輝けり」(克央)というのはどうでしょうか。「五月晴れ」は5月の好天のことではなく, もともとは梅雨の晴れ間のこと, とある(大意)(NHK放送文化研究所 <https://www.nhk.or.jp/bunken/summary/kotoba/gimon/097.html>)。言葉というものは奥が深いものだと思う今日このごろ。

[以上は6月16日(金)メモ]

「官邸の最高レベルが言っている」という文言が文科省の内部文書にあったそう。その内容はともかく, なんとなく耳馴染みのいい響きだな」と思っていた。良く味わってみると, リズムが五八五となっている。ほぼ川柳だなあと思った。6月17日(土)に, ふと, これをもとに川柳を作ってみたくなった。思案ののち, 「拙宅の最高レベルが料理酒」という句を思いついた。「料理酒」は料理をしながらワインを飲んでいる某夫人の姿をイメージしたのだが, ネットでの検索結果には「料理に使う酒」としか載っていない。「料理をしながら酒を飲む」で検索してみたが, 適

当な言葉が見つからない。改めてこの句をながめてみると、「私の家の最高レベルの酒はやっとうり酒なのです」と言っているようにも取れる。良く解釈すれば、忌野清志郎の代表曲「雨上がりの夜空に」と同じ「ダブルミーニング」の手法が織り込んであるともいえる。ただ、他人の目から見れば独りよがりかもしれない。そこでまた少々思案して、「拙宅の最高レベルがメイクして」という句を思いついた。一つ選ぶとしたら、どちらが良いだろうか。〔以上は 6 月 18 日（日）メモ、6 月 19 日（月）二句並べてはがきに書き投函〕

朝、新聞を読んだあと、川柳を思いつく。前に作った数合わせのような句「ランプは田中康夫の焼き直し」からひとひねりして、「いつぞやの知事に似ている大統領」としてみた。どのくらい面白いのか全く見当がつかないが、忘れないうちに葉書に書き留めて、ほとんど勢いで投函。〔6 月 20 日（火）メモ〕

テレビや新聞の報道で文科省の内部文書に「官邸は絶対やると言っている」との文言があったことを知る。完璧な五七五である。それとは別に先日、思いついたときに書いておいたスケッチから「道端の^{あざみ}薊供へて 手を合はす いつか吾らものさまになる」という歌を思いつく。信毎歌壇に投稿しようと思う。〔6 月 21 日（水）メモ〕

未明、目覚める。布団の中で、昨日の「官邸は絶対やると言っている」を少し変えて、「国民は絶対クロと言っている」とすればそのまま時事川柳として通用することを思いつき、すぐにはがきに書いた。ついでに「新婚の頃の寝息が今いびき」をオマケにつけた。これとは別のはがきに「友達を大事にするも程がある」「私物化と傲り強弁はぐらかし」という句も書いて投函。

朝、教務準備室にある連絡用の棚に封書が入っていた。3 月下旬に応募した公益財団法人武田科学振興財団の理科教育振興奨励金の贈呈決定通知書だった。研究費 30 万円が使えることになった。テーマは「**気体の拡散を効果的に視覚化する古典的実験を現代化(今日化)する試み**」である。この奨励金は研究会の旅費に使っても良いものだから、各種研究会で発表するなどして研究を進展させることができる。とてもありがたく、うれしいことだ。〔6 月 22 日（木）メモ〕

＊

最後までおつきあいいただきありがとうございました。次回分の執筆に今日中に取りかかる予定。（終）〔2017 年 6 月 22 日（木）15:00 ほぼ予定通り脱稿〕